



中村俊定文庫  
文庫 18  
964



寺の名利をいひく俳諧の虚実小拙くと虚実俳諧の  
かゝるれ名利を逸れし人のいふくくをを水く恐むむハ  
しとをを強ひくすにそのももみまふいとそ位給くれをま  
頭臨ちふ名利小や居くむとく喫茶の禪をを聞くハおれ水を  
いひく小あかしくふかのぬすくも振くあやゆる輪廻をこれ  
まあくもまふまあとのいふあのをまふとといひまのハ頻おるうつ  
ちのまふハくうらうをまふハかま月まきまらつかあ水をま  
れおのうく小使いまのやるむむ修の杖をうらむくこの水  
のいひすをを振く小西の方う免のくをちとよちくこのいん  
目をつまははくあはの伎を強くうのほあうむく小おぬを  
いふ一時起くまハく名めくうのまあくつくまむ組馬



の小湯の割の辺に有りては、  
文や、おのやとをゆり、  
と鉦の花より、  
中ねのつらき、  
月花のあま、  
れこれ月心、  
ゆやとら、  
名村の奴と、  
この水、  
汰の一味、  
泥を下ら、



そのふら  
水仙の花を  
れあつて  
鶺鴒の卵を  
小よりの  
雪月の中  
秋を  
鰻頭  
乙の娘  
はらち

雨さく深むる夕山  
香く匂ふ伽藍の菩薩の杖  
泪いづく箱の盃  
香の志をぬく佐助の  
すしりいぬの自  
酒ぬ鮫子の里の狐や  
本茶賣を刀自の舞  
馬くも鳴るさく  
柳の葉乃 花はく  
うまうまの目さる方小 志えれ

眠ひ、眠ひ眠ひ眠ひ眠

舍利を祀る塔のくや  
施の英 志らま よるの  
契りし首くさあくと  
あ~~~~君の名を呼く  
ち~~~~け波の後  
山法く嵐の中お  
色乃由輿くつ寸幣ミツク  
狩衣く三日月透す 軍立  
高をまひー細一枚  
このいふをえくつ小田の唇

眠ひ眠ひ眠ひ眠ひ眠

鏡より曇るゝ身 異月のぬ  
飯登りて呼れく 国の上おれ  
情を化のまのつりて女  
殺しくの悲ハ中くくの 初をばや  
うゝや并りてしとてひる  
身のひるをうきまうてく花咲く  
沈ちきりて一菊の春

ひ 眠 眠 目 目

そのみつ

おふゝのハきり一きりの 花  
うゝの 御く神く寸 新  
ワの 珠をを負つびく  
舎をぬりてハ水まゝし  
伏せや一月の 兎の泣もかく  
霧のうきまうて 秋  
ひやうく 碁くハ這入 壺の 中  
や并 潤子の 琴く雨も  
室町の 鬼くまきま 出さく

ひ 眠 眠 目 目

カハ下ふやしおすのおぬく  
くもくもくおふふれやふふ色線  
牡丹咲くも 徳倉の廐  
垢じくを召出さく 凡石の月  
痛り 多り 中ふ 一 静り  
三升支女の色 糸 ちく 鳥  
風のときあ 浦乃 夕 際  
根く 暮る 夕く 夕の 明 露  
境の まく 夕く 暮る 夕 暮  
おちく 夕の 暮る 夕く 暮る 夕 暮

う ひ 、 う ひ ら ひ ら ひ ら

信法のおく小豆齋く 浦乃  
結実小方の 暮る 夕く 暮る 夕 暮  
あふ 夕く 夕く 夕の 暮  
人目く 衣小 佐 暮る 夕く 暮る 夕 暮  
仙の 骨を おむ 寂 じ  
拈子く 矢をつくる 夕の あ じ 山  
命の り み ち 暮る 夕の 暮  
貞法の い き 色を 夕く 暮る 夕 暮  
鐘本く 暮る 境の 夕  
輕柳の 輕の 夕の 暮る 夕の 月

う ひ ら ひ ら ひ ら ひ ら ひ

金子商人。秋のこぼし  
糸と呼ぶ子を設けし岸の留  
葉の中を根の玉つり  
落葉の隙子小窓る。く明  
脊丈ヶ小窓る。光る桐  
八重一寸小窓る。水のす  
神くを汲るを汲る。糸

い、い、い、い、い

この花の字とく

を葉や清紙氷。花の  
指のふくまかき  
鏡戸小窓の人の糸  
松の火も風静ふ  
あつれくや月の色も  
糸瓜の蔓を窓の懸  
牛飼く官下さる。秋の  
馬をすかん湯く伽羅を  
いとわりの糸をさる糸

涼秀、あつ、い、秀、い、秀、い、秀

地湧る奥の細ら  
天本夢の五器ふく(さ)るる着  
姿えうけし波の呪咀  
しりの土舟運ふ 芦の中  
朱流の番の眼を望むし  
ゆきこの象茶(ま)すけるふの氣  
申の板敷む代傳の証  
白花(ま)るむらゝ建(ま)堺 筋  
鮫の目利(ま)早(ま)る春の日  
わのり(ま)と雛のル帳小風有(ま)

ひ 秀、ひ 秀ひ 秀ひ 秀ひ

むすしを(ま)く貝桶の襖  
女同士髪(ま)るる夜を燭(ま)るむ  
初瀬いの(ま)の傘(ま)ち(ま)る  
あれ酒の樽(ま)か(ま)りの蕨 縄  
松抽(ま)る(ま)くむろ(ま)ね(ま)ひぬ  
猿(ま)の面(ま)く灯(ま)も(ま)針(ま)の棚  
かさ(ま)り(ま)し(ま)人を(ま)ね(ま)す(ま)炬 茶  
サ(ま)茶(ま)子(ま)取(ま)の月(ま)のあ(ま)ら(ま)ぶ  
裏(ま)不(ま)二(ま)住(ま)ハ(ま)り(ま)へ(ま)さ(ま)秋(ま)の(ま)露

ひ 秀ひ 秀ひ 秀ひ 秀ひ 秀ひ



兜を糸 ぶ糸 一 枝

菩薩の行基の焼く壺を

名あるあるくさの池のよきひ

昆布抱く小島を何ぐるおのり

妻ハ深ゆる掠の脣

長安のや井を花とよふし

眺るとは然是名利門

秀 秀 秀 秀 等

血つのおまりく園を採

曙 やく免おろそくもも

涼 秀

あつーや雲吃おちるくう山

文 眠

本も竹もまのまるきうのうん

文 眠

ゆむつをちかむく  
みちるをひく

金岡の阿膠うまがりおし  
腕小まをえんやまくを  
髪おふやまのまむハ 乾 畑  
早園の 早より古すホ  
ワケれくわすくまのりく

カカウ

名利菴  
あふん

あつちむつおはゆりゆんくの台を拾ふ

おり親おと家も舟の末 京 開更

鯨も八より外ふりり 嘯山

ワッ門や人のまぬりもをぬれ 螺夢

大坂

中島の呉お師馬ふは節ん 二 拵

涼しきや草のまぶらの水ぬき 江 涯

江戸

海鈴くさくさうやまの角田川 完 来

花咲くまきうはしるお 泰 昌

嵐吹きまはるの如く  
 山ささくらん松のこゝろ  
 吹風く牛の御白の如く  
 秋の海を渡る白の如く  
 しひあめぬ雪の如く  
 咲くふいふの如く  
 夏十の苗もあはれ  
 西行の奇き松の如く  
 梅の如く松の如く  
 きよのふり人里をふ川田

伊勢 無曲  
 甲斐 可都里  
 相模 蜀花  
 上野 似鳩  
 近江 重厚  
 陸奥 吴江  
 若狭 北雅  
 加賀 魚春  
 能登 珠卜  
 越中 杜市

水鳥の如く松の如く  
 日と月やわはるの如く  
 雲の如く松の如く  
 雪の如く松の如く  
 花の如く松の如く  
 梅の如く松の如く  
 白梅の如く松の如く  
 春の如く松の如く  
 夏十の苗もあはれ  
 西行の奇き松の如く  
 梅の如く松の如く  
 きよのふり人里をふ川田

丹波 洞々  
 丹後 一色  
 但馬 木姿  
 出雲 龍尾  
 播磨 布舟  
 備後 何笠  
 長門 薰里  
 筑前 青人  
 豊前 南明  
 肥後 龜令

永魂をさすりく多秋やむおん  
ねのりや宗螺らうつくしの化

薩摩

完而

對馬

字湫

以下執筆

宇治

下方

杜若雨むさふふくくり梨  
ふきのたみ撰くくきくくみ  
うら垢詠のさの毛小ま川風か

衣翻

方外

京

駒丹

漢水

楚六

秋の蝶をくくはふはくか  
まのや只にりのあひり山  
大浪引舞ハ一ふの目きりか



